

会報

〔会長就任のご挨拶〕

佐藤 芳雄

先般の第16回会員総会におきまして、会長に指名されました。大変に光栄なことであります。微力ながら最大の努力を尽くしたいと存じます。なにとぞよろしくご協力とご支援を賜りますよう、会員のみなさま及び関係各位をお願いを申し上げます。

15年まえの1980年10月11日、慶應義塾大学三田校舎517番教室を会場として当学会の設立総会が開かれました。つい先頃のこのようにも思われます。半面、もうすでに15年という年月が経ったのかという思いがいたします。

まさに日本経済、日本中小企業の激動の15年であったといえましょう。1980年はロボット元年といわれました。ME先端技術・情報化が急速に発展普及し、85年のプラザ合意、円高不況、やがて急速な回復とバブル期とも後でいわれた平成景気、バブル崩壊と平成長期不況になってからすでに5年近く、21世紀を目の前にして、日本中小企業の将来像が不透明な状況にあります。

右肩上がりの成長基調はすでに終焉、基幹産業・主要産業の成熟、世界一の高人件費経済化と国際競争力の喪失、半数余の国民が特に買いたい物はないという「無党派」消費者層の現象、めくるめく「空洞化」の動き、価格破壊、安全神話崩壊、等々。

これだけの激動をくぐり抜けて来た日本の中小企業は、大変な苦難を経験しながら、それぞれに智恵と力をつけてきています。開業率の低下傾向は確かにかつてない状況で、「多産多死、過小過

多」といわれた中小企業の存在状況は大きく変わりました。創業支援策のメニューだけがいたずらに作られています。しかしやはり基本的な日本中小企業の将来像は見えていません。急激な変化の常態化、異質多元性の深化は間違いないでしょう。

かつて福澤諭吉は、封建社会と近代西欧文明の双方を経験できたことを「僥倖」とし、「一身にして二生を経るがごとし」、つまり「一人の人間が二人分の人生を経験できた」と表現しました。

研究対象としての中小企業は、私たち研究者の認識を超えて急速に変化しております。今日、日本中小企業をめぐるパラダイム・シフト、基本軸激変を直視する必要があります。このパラダイム・シフトを基点に日本ならびに世界の中小企業を多彩に研究できる私たちは、困難ではあるが、大変な幸運に恵まれているともいえましょう。

学会活動も、今日の変化を懸命かつ着実にフォローし、その将来を予測するものであるべきだと思います。学会創立以来の各会長、役員・会員のご努力を引継ぎ、活力のある学会であり続けるように全力を尽くして努力したいと存じます。重ねてみなさまのご指導ご支援をお願い申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。

